

# TEAP 用英単語集と大学入試用英単語集の比較分析

## — 選定語彙と語義難易度に焦点を当てて —

A Comparative Analysis of Wordbooks for TEAP and University Entrance Exams:  
Focusing on the Vocabulary Selection and the CEFR Level

熊谷允岐

Masaki KUMAGAI

---

### キーワード

英単語集、TEAP、大学入試、選定語彙、CEFR  
wordbooks, TEAP, university entrance exam, vocabulary selection, CEFR

---

**Abstract:** The aim of this study is to analyze and compare several wordbooks as used in preparation for two kinds of tests: university entrance exams and the Test of English for Academic Purposes (TEAP). The study focuses on vocabulary selection, vocabulary word senses, and the learning burden of each word sense adopted in the wordbooks. The results identify the shared vocabulary among the wordbooks as well as the six features of word senses in the shared vocabulary and their associated learning burdens. It further determines whether the relative word difficulty, as based on Common European Framework of Reference for Languages (CEFR), is statistically significant. This article proposes tips for coping with vocabulary with polysemic senses or homonymous senses. It concludes that learners can study vocabulary effectively and efficiently if they first memorize vocabulary shared by the two types of exams. Their learning burden also may be decreased if learners are mindful of the differences of word senses of each shared vocabulary which the six features show, even if there is statistically no difference among word senses.

## 1. 研究の目的

本研究の目的は、TEAP試験（以下、TEAP）対策の英語語彙学習教材（いわゆる英単語集<sup>1</sup>）と一般選抜入試（以下、一般入試）用英単語集に掲載されている語彙がどのように選定されているか、またそれらの語彙の語義がどのように選定されているか、という観点から比較分析を行なうことである。TEAPに焦点を当てた研究は珍しいものであり、TEAPを受験する学習者、あるいはその学生を受けもつ英語教員に対して、今後の語彙学習の方向性を考えるうえでの一つの視点を提供できれば幸いである。

## 2. 研究の背景

TEAPとはTest of English for Academic Purposesの略語で、上智大学と日本英語検定協会が共同で開発した、日本における「大学教育レベルにふさわしい英語力」を測れるように構成された4技能（「読む」・「聞く」・「書く」・「話す」）テストのことをさす（Rosvold & 関, 2015; 日本英語検定協会, 2017）。TEAPはおもに高校3年生向けで、テスト内容はすべての大学教育（留学も含む）で遭遇する場面を考慮して作成されている。難易度の目安は英検準2級～準1級程度とされ（旺文社編, 2015）、「これまで難関大学で出題されていたような、いわゆる『難しい』英語（たとえば19世紀のイギリス文学の引用や、やたらに難しい哲学に関する論文の解説など）」（Rosvold & 関, 2015, p.2）は英文として出題されない。同様に森田・Cook（2016, p.2）は、「アメリカの大学生活で使われる単語・熟語、そして図表描写をする表現など、これまでの大学入試対策の学習では出会わないものが数多くある」と主張している。また山口（2017）も、TEAP試験では一般的な大学受験用英単語集には収録されていない語彙が、頻出すると述べており、TEAPと一般入試とのあいだにおける出題語彙には違いがあることは間違いない。しかし出題語彙やそれら語義とのあいだにあまりに大きな違いがある場合、学習者は一般入試とTEAP語彙対策を別々に行なわなければならないだろう。1年というきわめて短い受験期下においては相応な負担になるだろう。

## 3. TEAP

### 3.1. TEAPにおける語彙の重要性

Wilkins（1972）が“without grammar very little can be conveyed, without vocabulary *nothing* can be conveyed”（p.111）と述べたことは有名であろう。当然ながらTEAPにおいても語彙は非常に重要な位置を占めている。たとえばTEAPのReadingセクションでは、語彙・語法問題が独立して出題され、問題数は20問と、全技能の大問中でもっとも問題数が多い。Rosvold and 関（2015）と萱、ほか（2016）はこれらを大半は語彙の意味から正解を導く、純粋な語彙力の問題であると述べ、学習者それぞれの語彙力が直接影響してくる問題構成となっているという。成績表内のReading評価項目においても、“Vocabulary and language knowledge”として4段階で評価される。またWritingとSpeakingセクションの評価基準では、語彙の知識・正確さが独立して評価されており、それらはTrim, North, and Coste（2001）の示すCommon European Framework of Reference for Languages（以下、CEFR）<sup>2</sup>のレベルで記載される。このように、TEAPには語彙力を測る問題が含まれているばかりでなく、語彙知識に対する評価

も行なわれている。

### 3. 2. TEAPの求める語彙レベルおよびサイズ

Taylor (2014) によれば、TEAPにおける語彙サイズ<sup>3</sup>は、British National Corpus (以下、BNC) を1,000 ワードファミリーごと、14のレベルに分類したBNC14リストから算出されており、そのうちでも初めの5レベル(4,000~5,000語レベル)までをおおよその範囲としている。4,000語レベル以下の語はCEFRでいうB1レベル、5,000語レベル以上の語はB2レベルとしており、Taylor (2014)はこの4,000~5,000語レベルまでの語彙の95%を知っていることが内容理解に必要なだとしている。Hu and Nation (2000)、Nation (2006)は内容理解には98%の語彙理解が理想だとしているものの、実質その基準に達することは難しいため、TEAPでは上記の95%を基準にしているという。

ReadingおよびListeningセクションにおけるタスク内の語彙レベルは以下に示す：

- ・4,000語レベル以内のタスク：R2A, R2B, L1A, L1B and L1C
- ・5,000語レベル以内のタスク：R1A, R3A, R3B, L2A and L2B<sup>4</sup>

Taylor (2014)によると5,000語レベル以上の語彙もタスク内には含まれるものの、以下の理由などにより許容可能とされている：

1. 低頻度語でも近年一般的な語彙になってきており、テスト出題者も受験者が知っている  
と予想している語彙(例：Internet, email)
2. 言い換えを行なうと文の意味がぎこちなくなってしまう可能性のある語彙
3. テスト出題者により、受験者が文脈からの推測で理解可能であると考えられた語彙
4. テキストを超えたレベルで読み手が持っている一般的知識により理解されうる語彙

加えてRosvold and 関 (2015)によれば、純粋な語彙力を測るReadingセクションPart1における語彙レベルを、英検でいうと2級~準1級、大学入試でいえばセンター試験よりは難しく、いわゆる難関私大(MARCH)レベルの難易度であると分析しており、同時に英検2級レベルからは50~60%、準1級レベルからは30~40%、残りは準2級や1級から出題され、1級レベルの語彙は1問出るか出ないかであるとの見解を示している。

### 3. 3. TEAPの語彙とAWLの関係性

前述のとおり、TEAPは学術的な文脈で遭遇する場面を考慮して作成されているため、Coxhead (2000)のAcademic Word List (以下、AWL)とも関連づけながら作成されている。Taylor (2014)はAWL内の語彙がたとえ5,000語レベルを超えていても、TEAPには組み込まれるべきとし、また同時に受験者にとって望ましい学習到達地点だとも主張している。従来、無修正のアカデミックテキストは約10%のAWLの語彙が含まれている(Coxhead, 2000; Green, Ünal, & Weir, 2009)が、EFL (English as a Foreign Language) 環境下の高校生にはかなりの負担となるため、とくに難易度の高いAWLの語彙は文脈からの推測が可能でないかぎり含まれないようにされている。よって、ReadingセクションはAWLの3~8%、Listeningセクションでは2~6%の語彙が含まれるようテスト作成者によってくふうされている<sup>5</sup> (Taylor, 2014)。

#### 4. 語義に対する困難性

磐崎 (2016) は英語のインプットおよびアウトプットのエラーにおいて、語彙的なものと統語的なものが存在するという。語彙的なエラーはおもに未知語の意味推測や、既知語のあいまい性の判断にかかわるもので、このようなエラーは文脈に応じたあいまい語あるいは多義語の処理を苦手とする学習者に起きるといふ。このような処理に影響を与える要因とし、磐崎は「高頻度語義バイアス」をあげている。たとえば、ある語義を解釈する際に、最高頻度語義である第1語義のみで解釈することで、文脈を考慮しない誤った解釈につながってしまうことがそれに当てはまるという。このようなバイアスはいったん思い込んだ語義がある場合、それを修正することができない「外国語学習上の確認バイアス」(confirmation bias; Kahneman, 2011) の一つであるという。一方統語的なエラーは、文を解釈する際にたとえ既知の語義が統語的に不適切であった場合にも、統語的再分析を行わずに、既知の語義のみで強引に文を解釈する際に生じるといふ(磐崎, 2016)。

語彙の多義性にかかわる困難性はかねてから指摘されており、牧野 (1969) は日本人英語学習者も多義語の学習に苦しんでいるという。元来、語彙のもつ意味は一つではないことが多いため、多義性の問題が語彙習得には複雑に関係しており(投野, 1997)、Laufer (1997) や Webb and Nation (2017) も学習者が苦手とする語彙の例として多義語 (polyseme) と同音異義語 (homonym) をあげている。たとえば *guilt* は多義語の一つであり、Webb and Nation は三つの意味「犯罪/責任/自責の念」をあげている。これら語義には「なにかしらの悪い行い」という共通性があり、これは「コアミーニング」と呼ばれている。したがって本研究では Parent (2012) の分類表も参考とし、同じ語彙内において語義は異なるものの、その根底には共通性を有している語を多義語と呼ぶ。同音異義語に関しては Nation and Parent (2016) の分類に従いたい。同音異義語とは発音が同じにもかかわらず、語義が異なる語彙をさす。たとえば *bank* は「銀行/土手」を意味し、*lie* は「横になる/嘘をつく」を意味する。重要な点は多義語と異なり、語義間に共通性がないことである。本研究では語義が異なるうえ、その根底に共通性がみられない語を同音異義語と呼ぶ。

#### 5. 分析対象

本研究ではおもに 6 冊の英単語学習参考書を分析対象としてとりあげた：

1. 『英単語ターゲット 1900 5 訂版』(以下、ターゲット 1900)
2. 『新版 百式英単語 最速インプット→2023』(以下、百式英単語)
3. 『TEAP 単熟語 Grip 1500』(以下、Grip1500)
4. 『TEAP 英単語ターゲット』(以下、TEAP ターゲット)
5. 『TEAP Vocabulary Building TEAP 語彙力増強問題集』(以下、TEAP VB)
6. 『TEAP 英単語スピードマスター』(以下、スピードマスター)

Kumagai (2017) は英単語集分析を行なうにあたり、東京都内の私立大学 1 年生 156 名を対象にアンケート調査を行ない、高校 3 年時に語彙学習に用いていた英単語集を調査した。その結果によれば、非常に多くの学習者が『ターゲット 1900』を使用していることが明らかとなった。

石川 (1998) でも『ターゲット 1900』は分析対象としてあげられており、多くの学習者に非常に長く愛されている英単語集の一つであろう。それゆえ、本研究でも大学入試用英単語集の代表格とし、分析対象とした。『百式英単語』だが、もともとは大学入試用に編纂されているが、TEAPに出題される語彙のカバー率が97.2% (太田, 2017) であるため、本研究ではTEAP対策にも耐えうる英単語集であると仮定し、大学入試用ではなく、TEAP用の英単語集の1冊としてとりあげた。他の4冊(3~6の教材)は、TEAP対策の英単語集である。TEAP対策の語彙学習教材はいまだ少なく、分析対象としてあげたもののみで、現在(2017年9月時点)刊行されているTEAP対策用英単語集はすべて網羅したことになる。また、それぞれの英単語集の特徴は以下の表を参照されたい：

表 1. 分析対象の英単語集とその特徴

書名	見出し総語数	抽出語彙のソース	出版年
ターゲット 1900	1900 語	旺文社独自の大学入試問題データベース(過去5カ年)	2011
百式英単語	2023 語	標準語彙水準 SVL12000 + 大学が出題する英文と語彙レベルが同等の一般英文記事	2017
Grip 1500	1532 語	不明	2016
TEAP ターゲット	1200 語	研究・教育で広く利用されている複数の学術語彙リスト + 海外の大学で使用されている文書データ	2016
TEAP VB	1080 語	不明	2017
スピードマスター	1046 語	不明	2016

Note. SVL = standard vocabulary list

## 6. 研究課題

以上の先行研究を概観したうえで、本研究では以下の研究課題を提示する：

- 課題 1：一般入試対策用英単語集と、TEAP対策用英単語集とのあいだにおいて、どの程度の語彙が共通語彙として抽出されるか
- 課題 2：共通語彙のうちで、語義に違いのあるものはどの程度存在し、それらにはどのような特徴がみられるか
- 課題 3：共通語彙間で、語義の難易度に違いはあるか

## 7. 分析方法

研究課題 1 を遂行するために、計 6 冊の教材において共通する語彙を抽出した。抽出対象となる語彙はすべて、英単語集の見出し語のみに限定した。ここでの見出し語とは、教材内の派生

語・語彙コラムなどに掲載されている語は外したものである。多くの学習者が見出し語の前に派生語やコラムに記載されている語彙から覚え始めるとは考え難いためである。ただし『スピードマスター』は見出し語に関連語を加えたうえで「基本語」と定義しているため、例外的に関連語も分析対象に入れた。また6冊中2冊には熟語<sup>6</sup>が含まれていたため、それらも除外した。以上をふまえ、それぞれの英単語集において抽出対象となった語彙数は以下のとおりである：

- |                       |                      |
|-----------------------|----------------------|
| 1. ターゲット 1900：1,900 語 | 2. 百式英単語：2,023 語     |
| 3. Grip1500：1,442 語   | 4. TEAPターゲット：1,200 語 |
| 5. TEAP VB：1,080 語    | 6. スピードマスター：817 語    |

研究課題2では、共通語彙における語義の抽出を行なった。抽出対象とする語義は、英単語集内で複数の語義が記載されている場合にも、原則は一つに限定した。『ターゲット1900』と『TEAP ターゲット』は、もっとも入試に頻出するとされる語義を第1語義とし、まず第1語義を暗記することを推奨している。そこで上記2冊の場合、分析対象となる語義は見出し語の第1語義とした。『百式英単語』も多くの語義は一つに絞られており、複数の語義がある場合にも優先して覚える語義は各語彙に一つ、太字で記載されている。したがって、『百式英単語』の分析対象となる語義は、見出し語の太字となっている語義とした。ほか3冊は、優先的に覚えるべき語義が赤字で表記されているため、分析対象は赤字の語義とするとともに、もし赤字の語義が複数ある場合、見出し語に付随した例文で扱われている語義と一致したものを採用した。

研究課題3を行なうにあたっては、抽出された共通語彙における語義に対し、English Vocabulary Profile<sup>7</sup> (以下、EVP) が定めたCEFRレベルを参照し、それぞれの語義が有する難易度を明らかにした。EVPによって割り振られたCEFRを以下のように数値化し、語義の難易度が高いほど、数値が高くなるように設定した：

- |             |             |             |
|-------------|-------------|-------------|
| A1：1 point  | A2：2 points | B1：3 points |
| B2：4 points | C1：5 points | C2：6 points |

研究課題3遂行の際には、対象となる語義に上記の数値を割り当て、分散分析を行なうことで、共通語彙間における語義の難易度に差があるか否かを調査した。

## 8. 結果および考察

### 8.1. 研究課題1

研究課題1では6冊の教材間において、どの程度の語彙が共通語彙として抽出されるかを調査した。結果として抽出された共通語彙はわずか29語であった。このような結果になった原因は、『TEAP VB』の編纂方法にあるだろう。『TEAP VB』は通常の英単語集では出てこないハイレベルな単語・新語を中心に収録しているため、他教材と比べて掲載語彙の難易度が大きく異なる可能性が高い。また学術用語や新語は名詞であることが多いとの見解で、収録語彙はすべて名詞に統一されている。ほかの英単語集では別の品詞も含まれているため、以上二つの要因により全体の共通語彙が減少したと考えると間違いない。ここで明白なことは、『TEAP VB』はほかのTEAP用英単語集とは異なった学習者を想定しているということである。教材の特徴に鑑みれ

ば、受験者のうちでも英語上級者が用いるのが妥当であろう。逆にとらえれば、ほかの TEAP 英単語集とは掲載語彙が大幅に異なるため、差別化という意味では他教材とは一線を画する。しかし本研究の目的の一つは、一般入試と TEAP を併用する学習者にとって、できるだけ語彙学習の負担を軽減するための共通語彙を提示することであるため、共通語彙が 29 語という結果は目的の遂行にそぐわない。ただし、『TEAP VB』はほかとは性質が異なることが明らかとなったため、本研究では上記教材を除外したうえで共通語彙を再抽出したことを了解いただきたい。再分析の結果、共通語彙は 139 語に増加した。とはいえ分析対象の平均見出し語数は約 1540 語であるため、抽出された共通語彙が決して多いとはいえない。一般入試用英単語集を除外し、TEAP 用のみで比較した場合に、共通語彙が大幅に増加するかといえばそうではない。TEAP 用のみで比較しても共通語彙はわずか 157 語で、一般入試用を含めた際と 18 語しか差がない。このようなことが生じる要因の一つは、TEAP 用の英単語集における語彙選定方法にあると考えられる。現在 TEAP は過去問が公開されておらず、唯一入手できるものが 1 回分の予想問題のみである。圧倒的な素材の少なさゆえに、TEAP に特化したコーパスはいまだ編纂されていないと思われる。その結果 TEAP 用の英単語集は、それぞれの著者独自がもつ TEAP 以外の英文データや語彙リストから語彙が選定されていると考えられる (表 1 参照)。抽出語彙のソースや選定方法が明らかでない英単語集も存在し<sup>8</sup>、著者の経験や勘が語彙選定に影響を与えている可能性も否定できない。よって、TEAP 用の英単語集間でも選定語彙にばらつきがあるのは当然といえる。もちろん教員・研究者・著者などの経験や勘も必要 (Simpson & Ellis, 2010) であるが、コーパスのような多量のデータと組み合わせることで語彙選定は初めて精緻化され、彼らの経験や勘が正しかったかどうか証明される (Martinez & Schmitt, 2012)。それらを考慮すれば、TEAP 用の英単語集は発展途上であり、今後より精度の高い語彙選定が必要であるのはいうまでもない。

また TEAP 用英単語集では、一般入試用では採用されていない大学生活に密接した語彙 (たとえば、*dean* や *student ID* など) を積極的に採用している。これをふまえると、一般入試用と TEAP 用の教材の差別化が成功しているといえる反面、TEAP と一般入試を併願する学習者にとっては厳しい結果になったといえる。

## 8.2. 研究課題 2

研究課題 2 では、抽出された共通語彙のうちで、語義に違いのあるものはどの程度存在しているかを明らかにした。前節で述べたように、本研究では共通語彙の再抽出結果をもとに、研究課題 2 および 3 が遂行されたことを了解されたい。TEAP 英単語集群と一般入試用英単語集間における共通語彙数は 139 語であったが、語義に違いがあったものは合計 109 語であった。つまり残りの 30 語に関しては 5 冊の教材間でまったく同じ語義が採用されていたということの意味している。語義に違いがあった 109 語はおもに 6 種類の特徴に分類された。

1. 品詞が同じで、語義も文脈に比較的左右されないもの
2. 品詞が異なるが、語義が文脈に比較的左右されないもの
3. 品詞は同じだが語義に関連性がみえにくいもの
4. 品詞が異なり、語義にも関連性がみえにくいもの
5. 語義に違いがあるものの、その根底に共通性を見いだせるもの
6. 英語の定義では一括りにされるが、日本語になると意味の異なる複数の語義をもつもの

まず初めに共通語彙 139 語中 109 語の第 1 語義に違いがあるという結果は、覚えることが推奨されている語義の多くにはばらつきがあることを示している。言い換えると、用いる英単語集が異なれば、学習者が初めに覚える第 1 語義にも違いが出てくるということである。第 1 語義が採用される際、それがコーパスの結果によるものか、编者による経験や勘によるものか、あるいはその両方であるかは英単語集によって異なるだろう。しかし少なくとも本研究で抽出された共通語彙間で、語義がすべて同じ語彙 (30 語) に関しては、それぞれの编者による見解が一致したととらえることもでき、まずその語義を覚えておけば問題はないだろう。例としては *abstract* (抽象的な)、*contradict* (矛盾する)、*grain* (穀物) などがあげられる。

残りの 109 語のパターンを簡潔にまとめたものが表 2 である。

表 2. 抽出語義における分類パターン別の特徴

	語義	品詞	語彙のエラー	統語的エラー	多義 / 同音異義	例	語義例
パターン①	≡	=	×	×	—	resident	住人 / 住民 / 居住者
パターン②	≡	≠	×	○	—	quote	引用する / 引用文
パターン③	≠	=	○	×	同音異義	degree	程度 / 学位
パターン④	≠	≠	○	○	同音異義	credit	~のおかげとする / 履修単位
パターン⑤	≠	—	○	○	多義	principal	主要な / 校長
パターン⑥	≡	=	△	×	—	revenue	歳入 / 収入 / 収益

Note. 筆者作成；≡ (ほぼ同じ語義)；≠ (異なった語義)；= (同じ品詞)；× (エラーが起こる確率は低い)；○ (エラーが起こる確率は高い)；△ (肯定的または否定的な含意をもつ語の場合、エラーが生じうる)

パターン①は語義に違いはあるが、品詞が揃っているもの、たとえば *resident* (住民 / 住人 / 居住者) である。すべて同じ品詞で語義がとりあげられているものが①の特徴であり、それらに鑑みるとこのような語彙群は、特定の品詞として文章内に登場する可能性が高いと推測される。つまり、覚えた語義の品詞と同じ品詞で語彙が出題される可能性が高いと予想できる。教材で覚えた第 1 語義と実際に出題される語義において品詞が一致していれば、統語的エラーおよび語彙のエラー (磐崎, 2016) は起こりづらい。なぜなら覚えた語義と出題された語義間での品詞が揃っているため、高頻度語義バイアス (磐崎, 2016) の影響を受けないと考えられるからである。語義に関しては若干のニュアンスに差異がある場合もあるが、「住民」を「居住者」という第 1 語義で解釈しても、大きな支障はないと考えてよい。したがってパターン①の語彙に関しては、それぞれの学習者が語義の違いに少し注意を払えば問題はない語彙群だと判断できる。

パターン②の語彙は *quote* (引用する / 引用文) や *range* (範囲 / 範囲にわたる) が例である。②も語義自体に大きな差異はなく、その点では高頻度語義バイアスの影響は受けないだろう。しかし②の語義は品詞が揃っていない。語彙間で品詞が揃っていないということは、*range* を例にとればある编者は「範囲」という名詞形が出題されると考え、またある编者は「(ある) 範囲にわたる」という動詞形が出題されると考えて第 1 語義に採用していると考えられる。このような場合、第 1 語義をそれぞれ名詞形と動詞形で覚えた学習者が、試験で逆の品詞と出会った場合、バイアスの影響を受け統語的エラーが生じる恐れがある。よって②のパターンに分類される語彙を学ぶ際には、語義の違いよりも、自身が覚えた品詞とは異なる品詞で出題される可能性があることに注意し学習する必要があるだろう。

パターン③では *acknowledge* (認める / 感謝の念を示す) や *degree* (程度 / 学位) などが含まれ

る。③に属する語彙において、語義の品詞には違いがみられないため、おおよそ動詞ならば動詞、形容詞ならば形容詞のかたちで出題されることが予想される。つまり統語的エラーは生じない。しかし、語義は異なると共にそれらは多義語ではなく同音異義語と呼ばれる語彙群である。Laufer (1997) があげる語彙困難性の要因の一つであり、Nation and Parent (2016) の述べるように、語義間に共通性がないものをさす。つまり *degree* の「程度」を第 1 語義として覚え、この意味しか知らない学習者の場合、「学位」の意味合いで文章内に出会った際、バイアスの影響を受けて誤った解釈をする可能性が高くなる。語義間に共通性もないため、コアミーニングを考えても正解にたどり着かない。③に分類される語彙は文脈によってまったく異なる語義が表出するため、それぞれの意味にきちんと注意を向けて学習することが必要である。

パターン④は学習者にとってもっとも困難性を感じる語彙であろう。*credit* を例にとろう。*credit* は第 1 語義として「～のおかげとする / 信用 / 履修単位」の 3 種類が抽出された。まず名詞と動詞で品詞が異なるうえに、語義間に共通性がない。つまり④も③と同様、同音異義語である。③は品詞が揃っていた同音異義語であったのに対し、④は品詞も異なるため、どれか一つの語義しか覚えていない場合、統語的エラーと語彙的エラーを併発する恐れがある。④に属する語彙は本研究では幸いにも 1 語のみであったため、学習者にとっては救われる結果かもしれない。このような語彙は③と同様、それぞれの意味が独立していることをきちんと把握し、かつ当該の語彙に出会った際は、統語的再分析を要する可能性もある語彙であることを把握しておくとうまいだろう。

パターン⑤は前述の多義語に分類される語彙群である。品詞は同じ場合と異なる場合の両者があり、語義は異なっている点が特徴である。語義間には共通する意味が存在している。田中・佐藤・阿部 (2006) は、一見すると語義が不明瞭な語彙と出会った際、コアミーニングを知っていれば、周辺的な意味への拡張をうながすと主張しており、多義語への効果的な対処法であるとしている。たとえば *principal* は「主要な / 校長」の語義をもつ。一見すると語義間に共通性はないが、「校長」とは学校をとり仕切る最高責任者の一人であり、校長のいない学校は存在しないだろう。つまり校長は学校になくってはならない「主要な」存在である、などのように語義間の共通性を見いだすことができる。このように多義性をもつ語義は意味が拡張されることで異なる語義に変化する。多義語も学習困難性を感じる大きな要因の一つであるのは Nation (1990)、Laufer (1997)、Webb and Nation (2017) が指摘するところだが、同音異義語に比べ語義間に共通性があるため、比較的学習しやすいと考えられる。ただし共通性があるからといって品詞もすべて同じだとはかぎらない (例：*graduate* 「卒業する / 大学院生」)。したがってこのような用例と出会うたびに、それらを語義、品詞の違いに注意して丁寧に覚えていくことが肝要である。その際コアミーニングに着目するのもよい方略の一つであろう。

パターン⑥に分類された語彙群だが、これらは言語によって概念と語彙の結びつきが異なっている点が特徴である。日本人の主食「コメ」は稲、米、飯など日本語では分類されるが、英語では *rice* の 1 語であらわされる (望月・相澤・投野, 2003; 平賀, 2016) ことはよく知られた例である。それと同じく、たとえば *revenue* は日本語では文脈によって「歳入 / 収入 / 収益」と使い分ける必要がある。しかし EVP の定義では細分化されておらず、“large amounts of money received by a government as tax, or by a company” と記載されている。このような英語と日本語語義が 1 対多の関係にある語彙の場合、中立的な意味、*revenue* でいえば「お金が入ること」と解釈できれば学習者にとって大きな障害にはなりえないが、このような語彙は Nation (2013) も述べるような、語彙に対する意味・概念にかかわる知識であり、最終的には文脈により適切な

語義を連想できるようになるとよいだろう。とくに望月・相澤・投野(2003)が指摘するような肯定的あるいは否定的な含意をもつ語(例: *skinny*)などの場合、解釈にズレが生じる可能性があるため、注意したほうがよいだろう。

以上六つの語義パターンを検討したが、共通語彙間においては一つの語彙内で語義が異なっても、どの語義がTEAPあるいは大学入試で出題されやすいかについては不明瞭であった。言い換えれば、TEAPと大学入試で出題される語彙は共通語彙以外で差別化が図られていると解釈してよいだろう。

### 8.3. 研究課題3

研究課題3では、計5冊の英単語集それぞれの共通語彙におけるCEFRレベルの平均値に有意差があるかどうか検証するため、分散分析を行なった。対象となる語彙は、共通語彙139語であったが、比較対象となる語義がEVPに掲載されていないものがいくつかあったため、本研究ではそのような語義を含む語彙を除外し、119語を分析対象とした。分析の結果、英単語集によって共通語彙における語義の難易度には差がないことがわかった( $F(4,590) = 0.024, n.s.$ )。このことから、語義に違いが多くあるものの、CEFRの観点からすれば、一般入試とTEAPのどちらかが高難易度の語義を要求しているとは考えにくい。おのおのの結果の平均値をみると約4.2となっており、本研究で設定した数値と比べれば、共通語彙は平均B2レベルの語義が多いと考えることができる。ただし語義のレベルに差がないことと、学習者が感じる難易度とはまた別の問題である。つまりCEFRの値には差がないものの、学習者によっては得手不得手となる語彙が存在するということである。また平均で差はないが、たとえば *institution* のように「機関」という語義がB2、「制度」という意味がC2のように幾分か難易度に差がある語彙もある。したがって細かい点では、語彙間の語義難易度に差があるものは、学習者には習得しづらいものの一つとなりそうである。

## 9. 結論

本研究ではTEAP対策の英単語集と一般入試用英単語集に採用されている語彙および語義に焦点を当て、比較・分析を行なった。おのおのの英単語集は、それぞれの試験で頻出すると考えられる語彙・語義が選定されていることが前提である。そのような両者の英単語集から抽出された共通語彙は、双方の試験で頻出する語彙であると考えすることは想像に難くない。共通語彙の数は決して多くないため、共通語彙のみで試験に対応できるとは考えていない。しかし短い期間内にTEAPと一般入試を併願する受験生にとって、できるだけ効率的に語彙を学習してもらうには、まず本研究で抽出された共通語彙から優先的に学習する、あるいは自身の教科書や問題集、英単語集を学習する際のサポートとして使用することを推奨したい<sup>9</sup>。ただし共通語彙間における語義には、品詞も含め違いが多くみられた。当該の学習者はまず、同一の試験対策の英単語集でさえ、第1語義に多様な語義が採用されていることを認識しなければならない。自身の覚えた語義のみで誤った意味解釈を防ぐためにも、本研究で示した六つの特徴を参考にし、自身が覚えなければならない語義はどのようなパターンに分類されているのかに注意を向けながら、共通語彙を覚えるるとよいだろう。その際、語義間の共通性を自身で考えながら覚える活動も語彙学習には必要であろう。このような学習は共通語彙だけにとどまらず、ほかの語彙を学習する際にもたいせつであることはいままでもない。同様に英語教員にとっても、本研究結果をもとに学習者を支

援する一つの指針になることを期待したい。たとえば共通語彙を授業内で扱う場合、重みづけをして学習者に提示したり、語義の豊かさとそれゆえの解釈の難しさ、語義に潜む共通項などを学習者とともに考えたりする活動も可能であろう。本研究が学習者および教員の方々にとって有用な指針となれば幸いである。

## 註

- 1 英単語集の定義は Kumagai (2017) の “specialized materials for memorizing English vocabulary effectively and efficiently” (p.7) を採用する。
- 2 CEFR は 6 段階のバンド (A1~C2) が設定され、TEAP ではそのうちの A2~B2 に焦点を当て、測定に用いている。
- 3 ここでいう語彙サイズとは、Reading・Listening セクションで扱われる語彙をさす。
- 4 上記タスク名は技能・Part 名・タスク名の順で構成されており、たとえば R2A であれば R = Reading セクション、2A であれば Part 2 のタスク A をあらわしている。略称は Taylor (2014) より。
- 5 本研究の著者は、TEAP の Reading および Listening セクションにおいて、実際はどの程度 AWL の語彙が組み込まれているかを、TEAP が公開している見本問題をもとに簡易的な調査をした。調査では AWL の見出し語のみの場合と、見出し語に加えワードファミリーも含めた場合の 2 通りを考慮した。結果は Reading で 4.11~7.71%、Listening で 2.45~4.35% が AWL の語彙で構成されていた。この結果は先行研究の示す数値範囲内で、少なくとも TEAP の見本問題においては AWL の語彙が適切な量含まれているようである。
- 6 ここでの熟語とは、それぞれの教材内で熟語に指定されていた見出し語をさす。
- 7 EVP とはケンブリッジ大学出版局、ケンブリッジ ESOL (English for Speakers of Other Languages) が中心となり構築したもので、B2 レベルまでで 4,700 語、C2 レベルまでで 6,500~7,000 語をカバーしている (Capel, 2012)。
- 8 近年語彙の選定ではコーパスを用いて編纂されるのが一般的 (Nation & Sorell, 2016) になってきているため、選定方法が明記されていない教材に関してもなんらかのデータベースが参考にされていると思われる。よって本研究では、各教材で語彙選定をする際のデータベースがおのおので異なるとはいえ、ある一定の妥当性をもって語彙や語義が選ばれている、言い換えれば、当該の試験に出題される語彙や語義がある程度の基準をもって選定されていることを前提とし、考察を進めていきたい。
- 9 学習者の視点からいえば、両者の試験に頻出する語彙を包括的にカバーできる英単語集があれば理想である。しかしたとえば TOEFL と IELTS に出題される語彙を包括的に学べる教材も著者の知るかぎりでは開発されていない。現状では、片方の試験用英単語集を終えたのち、もう片方の試験用のものも学習し、既知の語彙は飛ばしながら覚えるというやり方が現実的である。重要な点は、ここでいう「既知の語彙」とは 1 冊目に使用した英単語集で覚えた語彙も含まれるという点であり、それは本文中で述べている共通語彙と同じものをさす。しかし先に述べた学習法の場合、2 冊目を学習した際に出会った既知の語彙が、1 冊目の教材でも学習した語彙かを 1 語ずつ確認していくことは難しい。しかしあらかじめ共通語彙が提示されれば、それらを参考に「これはどちらの試験にも出る語彙かもしれない」という認識が学習者に芽生え、彼らの語彙学習に緩急がつくとの推測である。

## 引用文献

- 石川慎一郎 (1998). 「英語コミュニケーション語彙—大学入試用英単語集の有効性の検証」『言語文化学会論集』11, 3-19.
- 旺文社 (編) (2015). 『TEAP 実践問題集』旺文社.
- 旺文社 (編) (2016). 『TEAP 英単語ターゲット』旺文社.
- 太田義羊 (2017). 『新版 百式英単語 最速インプット→2023』西東社.
- 菅忠義・トーズ, J.・土屋章子・小倉雅明・味岡麻由美・熊沢あきよ (2016). 『合格への集中対策 TEAP

- 予想問題』テイエス企画。
- 田中茂範(編著)(1987).『基本動詞の意味論：コアとプロトタイプ』三友社出版。
- 田中茂範・佐藤芳明・阿部一(2006).『英語感覚が身につく実践の指導－コアとチャンクの活用法』大修館書店。
- 投野由紀夫(1997).『英語語彙習得理論－ボキャブラリー学習を科学する』河原社。
- 日本英語検定協会(2017).『TEAP Test of English for Academic Purposes』.  
<http://www.eiken.or.jp/teap/> から取得(2017年8月27日)。
- 磐崎弘貞(2016).『EFL学習者の語彙エラーと辞書情報の活用』南出康世・赤須薫・井上永幸・投野由紀夫・山田茂(編)『英語辞書をつくる－編集・調査・研究の現場から』(134-152頁).大修館書店。
- 平賀正子(2016).『ベーシック新しい英語学概論』ひつじ書房。
- 牧野力.(1969).『多義にどう対応するか－多義相互間の論理の類型化について－』『英語教育』9, 10-14.
- 宮川幸久・ターゲット編集部(編)(2011).『英単語ターゲット1900 5訂版』旺文社。
- 望月正道・相澤一美・投野由紀夫(2003).『英語語彙の指導マニュアル』大修館書店。
- 森田鉄也・Cook, T.(2016).『TEAP英単語スピードマスター』Jリサーチ出版。
- 山口重彦(2017).『TEAP Vocabulary Building TEAP語彙力増強問題集』湘南社。
- ロゴポート(編)(2016).『TEAP単熟語Grip1500』アスク出版。
- Capel, A. (2012). Completing the English vocabulary profile: C1 and C2 vocabulary. *English Profile Journal*, 3(1), 1-14.
- Coxhead, A. (2000). A new academic word list. *TESOL Quarterly*, 34(2), 213-238.
- Green, A., Ünal, A., & Weir, C. (2009). Empiricism versus connoisseurship: Establishing the appropriacy of texts in tests of academic reading. *Language Testing*, 27(3), 1-21.
- Hu, M., & Nation, P. (2000). Unknown vocabulary density and reading comprehension. *Reading in a Foreign Language*, 13(1), 403-430.
- Kahneman, D. (2011). *Thinking fast and slow*. London: Penguin.
- Kumagai, M. (2017). Vocabulary learning strategies in wordbooks: Toward the development of a new wordbook. (Master's thesis). Rikkyo University.
- Laufer, B. (1997). What's in a word that makes it hard or easy: some intralexical factors that affect the learning of words. In N. Schmitt, & M. McCarthy (Eds.), *Vocabulary : Description, acquisition and pedagogy* (pp. 140-155). Cambridge: Cambridge University Press.
- Martinez, R., & Schmitt, N. (2012). A phrasal expressions list. *Applied Linguistics*, 33(3), 299-320.
- Nation, P. (1990). *Teaching and learning vocabulary*. Heinle: Cengage Learning.
- Nation, P. (2006). How large a vocabulary is needed for reading and listening? *Canadian Modern Language Review*, 63(1), 59-82.
- Nation, P. (2013). *Learning vocabulary in another language* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.
- Nation, P., & Parent, K. (2016). Homoforms and polysemes. In P. Nation (Eds.), *Making and using word lists for language learning and testing* (pp. 41-53). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Nation, P., & Sorell, J. (2016). Corpus selection and design. In P. Nation (Eds.), *Making and using word lists for language learning and testing* (pp. 95-105). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Parent, K. (2012). The most frequent English homonyms. *RELC Journal*, 43(1), 69-81.
- Rosvold, K., & 関正生(2015).『TEAP攻略問題集』教学社。
- Taylor, L. (2014). A report on the review of test specifications for the reading and listening papers of the test of English for academic purposes (TEAP) for Japanese university entrant. Eiken Foundation of Japan. Internal report scheduled for publication in 2014. Retrieved from [http://www.eiken.or.jp/teap/group/pdf/teap\\_rlspecreview\\_report.pdf](http://www.eiken.or.jp/teap/group/pdf/teap_rlspecreview_report.pdf)
- Trim, J., North, B., & Coste, D. (2001). *The common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Simpson, R., & Ellis, N. (2010). An academic formulas list: New methods in phraseology research. *Applied Linguistics*, 31(4), 487-512.
- Webb, S., & Nation, P. (2017). *How vocabulary is learned*. Oxford: Oxford University Press.
- Wilkins, D. (1972). *Linguistics in language teaching*. London: Arnold.